

はじめに

## 1. 社会学部の成立；理念と実態

(1) 新制一橋大学の成立と社会学部；3学部1研究所で出発、社会学部の独立が認められなかった。2年後に法学部と分離独立。本学の歴史を大きく振りかえると、はじめに実学的性格の強い商業教育があり、そのなかから経済学系が自立化してきて、大学昇格運動の原動力に、しかし法学部系は商学・経済学の法約側面として小さいながらも早くから充実。1920年、商科大学昇格にさいして、学生の受講科目の構成を見ると、必修科目・選択科目ともに「商業学に属するもの」「経済学に属するもの」「法律学に属するもの」に分けられており、ほかに「語学に属するもの」が必修科目となっている。のちの社会学部に連なる線は、選択科目の最後に「四、その他、外交史、社会学、人種学、高等数学（A二）」とあるうちの社会学・人種学だけ。

ところが社会学部独立にさいして上原構想が前面に出されて、「本学部は、社会科学の総合的研究を必至とする新時代の要求に応じ社会諸科学に基礎理論を与え、それと他の人文諸科学との関係を明かにし」（以下に教育学関係の記述が続く）、と社会学部に総合的で高邁な大理念が与えられ、「社会科学の総合大学の構想は同時に社会学部をもつことなしには成立しない」とされた。上原はまた、「教養としての文学、哲学が、実は他の専門諸科学にとって欠くことのできない基本的な創造性となるものであることを自覚し、教養と専門研究の総合を志して」いるのだとも述べている。

(2) 発足時社会学部の学問の特性；上原・高島らの高邁な理想主義的理念に基づき、総合的な全体性、批判的な原理性、現代的な問題関心に立った実践意欲などがうかがえる。この時代の上原・高島の学問はそのようなもので広い社会性をもって発信されており、2人とも、退職後もそうした立場を貫き、思索を深めた。高島は、高齢になっても重要な理論的著作をつぎつぎと発表。

発足時の社会学部の研究状況を表現するものとして、上原専禄編『社会と文化の諸相』（1955年）がある。11論文中、中国関係2篇以外はすべてヨーロッパの文学や思想など、その当時の社会学部が実際にカバーしえた領域が表現されている。

上原の世界史、高島の社会思想史と社会科学論は、こうした状況を越えようとする意欲的なもので、戦後日本の学問史のうえでも重要。たとえば上原の世界史の提唱は、歴史学・歴史教育に大きな影響を与えた。欧米と日本に中心をおいた一国史的な歴史学を批判し、「世界史的現実の生きた動きそのものは日本の歴史学の進歩よりもはるかに前にいつてしまっている」として、「世界史的なものの見方」「現代史的なものの見方」を力強く主張。しかしこの論文で彼が世界史の新しい現実としてあげている事例は、バンドン会議（55年）で、現代の研究者の関心とは大きく異なっている（上原『歴史学序説』）。

(3) 後知恵の感想：全体性、批判性、実践性への強い意欲とそれを具体的研究のなかで具体化することの困難さ、志あつて力足りず、専門に特化しきれない素人っぽさ？こうした特徴は、歴史学に関してはある程度まで自覚されていたらしい。増田四郎によると、一橋歴史学の黄金時代は大学昇格運動の時代から商科大学時代までであり、その特徴は、日本、東洋、西洋の垣根を取りはらった“素人の歴史”、在野精神、日本社会の学問的位置付けという実践性にあり、「三浦（新七）先生のいちばん好きな言葉は“素人の歴史”」だった（『一橋の学風とその系譜 2』）。山田欣吾はその増田を、増田は「自らの歴史を好んで「しろうとの学問」と称したが、これぐらい適確に教授の学風を言いつている言葉はない」とする（『一橋大学学問史』）。称賛の意味だが、山田の立場からの自分と増田との区別化？

東大アカデミズムのちがいは

多面的に統一的にしるべ... 社会学部内学問に共通する大

## 2. 福田徳三の学問と学風

全体性、批判性、実践性を一身に体現したのが福田、大学昇格運動以降の一橋の学問は、福田の系譜を引くものが多い。こうした包括性ゆえのエネルギーと情熱、またその故の学生への説得力。

cf. 如意団 (生神のり)

(1) 生涯 (1874~1930)：東京神田の刃剣商の家に長男として生まれる。85年、母信子の意向で植村正久より受洗。信子は明治女学校創立者木村鏡子の親友、その弟が田口卯吉、福田は小学生のころ『日本開化小史』を読み、田口を慕って経済学者になったとする。98年ドイツ留学、主としてミュンヘン大学でL・ブレンターノに学ぶ。同年12月、「欧米商業教育の近況」を同窓会々誌に寄せる。1901年1月、福田ら8人、ベルリンに会し「商業大学設立の必要」を草し、同窓会々誌に発表、大学昇格運動はじまる。同年9月帰国。1904年1月、会計官の公金横領事件についての学生大会で、福田、松崎校長を罵倒、公金不正流用ズルの名目で同年8月休職、慶応教授となる。しかし休職中も学生とのかかわりは持続し学生には圧倒的人気、1910年、講師として復帰、19年教授。同年吉野作造らと黎明会組織、1925年、モスクワ学士院200年祭に招かれ、ケインズの講演を批判、ソヴィエト側とも論争。1928年、3・15事件ととかかわりでの河上肇辞任問題で京大当局などを批判。

重年(19) 北村厚治

大卒昇格運動 (1911)

(2) 学説の概要；生存権を根本におく厚生経済学、「財産を中心とする私法はこれに対しては助法…私法の原則の発動は根本権と矛盾するものは徐々に改更せらるるをうべし」（『生存権概論』）。市場原理、それによる生産力発展が前提だが、しかしそれ自体が自己目的ではなく、「資本主義社会に於ける共産原則の展開」（『厚生経済研究』）が福田の立場、そのためには生存権の尊重と労働組合運動など労働者階級の闘争が重要。現代の福祉国家論につらなるが、マルクス労働価値説を含めた階級闘争の積極的肯定で異なる。ソヴィエト社会主義は流通の正義を否定した配分の正義の立場で、生産力発展を阻害していると、労農ロシアを見る。

福田の経済学説は、社会問題と労働運動が重要な意味をもつようになり、体系化され



はじめたあたりでマルクス主義の影響力の拡大に遭遇した。福田はこうした状況から当時の日本では少数派となったが、それは当時の思想状況からいば割を食ったもので、むしろ現代によく当てはまるか。

(3) 学制改革で急進的；「大学の本義とその自由」という論文で、徹底した大学自由論。大学とは、「研究者の研究の為にする自由、自治、独立なる団体是なりよ、この研究者には学生も含まれる。エスケープ、カンニングなどは「専門学校の宿弊」、「如何に嚴重に取締るとも此等の悪習は決して已むものにあらず、其故は専門教育を授くるに研究を本位とせざるの一事にあり、教ゆる者に研究なくして何ぞ清新澆刺たる英気あらんや」。

並行講義、ゼミナール制、必修科目削減など。

(4) ラディカルな批判的リベラリズム；立憲的国民国家日本の理念は前提、天皇へも穏和な敬虔さ？しかしそうした前提が共有されるべきだと確信しているため、その立場からの批判に徹底性。国民国家的公共圏の内部での最急進派？「笛吹かざるに踊る」はそうした立場の典型。28年4月、3・15事件とのかかわりで、河上肇は京大当局から辞職を求められ、依願免官、だが福田によれば、国体にかかわるということで京大当局は「神経興奮症に陥っている」、自分は学説上は河上に反対で今も論争中だが、この問題では自分は断固として河上を擁護するという。河上は「如何なる場合にも、国法に触るゝが如き行為を敢てする人でないことを、三十余年にわたる学交の間において熟知してゐる」。学生についても、彼らをこうした行為に進ませたことを深く反省すべきは官憲の側だ（『厚生経済研究』）。

マルクス派と  
一般に受け

名論文

学内批判が強い  
性格の  
似ている

(5) 福田と田口卯吉；田口はアダム・スミス流の自由主義経済論をとっているもので、ブルジョアジーのイデオロギーとされやすいが（森戸辰男など）、日本のブルジョアジーはつねに政府の保護干渉を求め、自由放任を求めたことがない。田口はすべての特権に反対するために自由主義経済論をとったのであって、田口の本質は平民主義、文明開化主義、自由民権主義。「旧幕臣江戸っ子」である田口の本質は、「始終一貫政治的被抑圧者のイデオロギー」、もっと長生きすれば、河上に代って日本一のマルキストになったかもしれない、という（『厚生経済研究』）。

「大不平から出づる大公平の論」（『経済学論攷』）とは、福田の田口評だが、福田本人にいつそう該当しよう。それを支える情熱と論争性・レトリック。

日本2151178  
マルクス派と  
一般に受け

おわりに；卒業生の活動に拾う

あ) 三浦展『下流社会』（2005年、光文社新書）  
ネミングはついでにのち

い) 津田真澄編著『新世代サラリーマンの生活と意見』（1987年、東洋経済新報社）

う) 『現代思想』と池上善彦

↓自説に及ぼす書物

自説

日本  
七つ  
日本の経済学  
の  
一  
世  
代